

から1901年までに6回寄稿していることが分かった。みな達意の独文で書かれている。

独語達人・池田陽一を生んだのは勿論、本人の素質と努力によるところが大きいですが、受けた教育の影響も大きいと思う。彼は12、3歳頃から私塾でドイツ語を学び、その後も東京外語と東大医学部において徹底した、かつ長期（但し外語時代は短期間）にわたるドイツ語教育を受けた。しかも教師は殆どドイツ人であった。だが明治後期になると、医学志望者も高等学校（旧制）で初めて独語を学ぶようになり、語学力が明治前期の学生に比べて劣るようになるのである。

彼の医学上の功績としては日本に於ける帝王切開術の紹介者として知られ、東大医学部を卒業して2年後、1885年（明治18）福岡医学校（九大医学部の前身）教諭時代に骨盤狭窄の妊婦に帝王切開を行い、しかも母子共に健在であった。それについて自ら語った「元福岡医学校教諭池田陽一博士の追憶談」が『五十年史 九州大学医学部』の巻末に収められている。だが、彼の非凡な語学力に興味がある筆者は、それには全く触れず産婦人科医としての功績だけを述べた『佐賀県の事業と人物』（大正13年刊）の記述には不満である。

亡くなったのは昭和12年10月7日。墓は佐賀市赤松町の龍泰禅寺にある。

長男・一男は父の跡を継ぎ、福岡で産婦人科病院を開業。前記筑紫重臣の語るところでは、彼は病理学の泰斗アショフ博士の下で3年研鑽を積んだだけに、日常診療のすべてが正確なドイツ語で処理されたという。

また三男・池田不二男（1906-1943）は、昭和初期の名歌謡「幌馬車の唄」「並木の雨」「花言葉の唄」「雨に咲く花」等の作曲者である。

谷口長雄のドイツ語修業



谷口長雄

熊本医科大学の前身・私立熊本医学専門学校の校長を務めた谷口長雄（1865-1920）に関する文献では『谷口長雄伝』（谷口長雄先生伝記編纂会、昭和12年）が最も詳しい。同書には谷口のドイツ語学習歴についても触れられているが、簡単すぎる上に誤記もあるので補っておきたい。

谷口長雄は郷里松山で中等教育を終えると、明治13年医学を志して上京した。医を以て名を成すためには先ず東京大学医学部予科に入学する必要があった。その予科の入試科目は国語漢文とドイツ語と数学の3科目であった。当時医学はドイツ医学に範を採っており教育もドイツ語で行われていたので、ドイツ語は特に重視された。

入試では数学もドイツ語で出題された。それで予科に入学する前に私塾等でドイツ語を学ぶのが普通のコースだった。谷口も上京後9月11日に本郷台町の独逸学校（『谷口長雄伝』に独逸語学校とあるのは誤り）に入学し初めてドイツ語を学んだ。この独逸学校は明治11年（1878）に山村一藏によって設立された私立のドイツ語学校で、明治10年

代に最も隆盛し、ここを出て東大医学部予科に進んだ人は非常に多い。谷口は独逸学校編纂『ドイツ語入門』（明治12年）によってドイツ語の初歩を学んだと見てよいであろう。同書はアルファベットに始まり、発音・習字・読章のほかに医学部予科の入試に対応するために数字と九九をドイツ語で言えるようになるための練習が収められていた。

だが、谷口が独逸学校にいた期間は短く、友人の北川乙治郎と共に東京外国語学校（旧）に転学している。『東京外国語学校一覧』（明治14、15年）を見ると、北川と共に独語科の第2年第2期生として名がある。その科目には読法・習字・書取・文法・暗誦・会話・作文・訳文・万国地理・万国歴史・算術・皇漢書・体操が計週28時間あった。そして参考書として地理学と万国史の原書6種が挙げてあった。東京外語はカリキュラム・教科書・教員などいずれの点でも独逸学校より勝っていたが、谷口は今度も短期間でやめている。そして明治14年5月、医学部予科を受験し、成績優秀で4等上級に編入された。『東京大学医学部一覧』（明治14、15年）を見ると、「予科四等生徒甲」欄に他の63名（その中には呉秀三、北川乙治郎、岡田和一郎、石橋忍月、福島鳳一郎らがいる）と共に谷口の名がある。ドイツ語教員にはゼレスニー、グロート、吉田謙次郎、川上正光、生田堯則がいた。谷口は早くも同年11月には3等へ特進された。彼の独語力が相当に高かったことが分かる。当時の医学部は予科の上に本科があり、それぞれ5等より1等までで各等上下（甲乙）級にに分けてあった。予科の科目ではドイツ語が最重要科目であり、例えば3等では上下級とも独語学が週12時間あり、その他の算術、地理、幾何学等もドイツ語の教科書を用いたので語学上は恵まれた環境にあった。さらに上級になるとドイツ語の時間は8～10時間になったが、ラテン語が週4時間あり動植物学、鉱物学、博物学、代数学等が加わり、ドイツ語の原書を用いたので、予科時代はドイツ語の勉強に明け暮れたものと想像される。

医学部予科は明治15年6月東京大学医学部予備門分養に改称された。谷口は明治14年5月医学部予科4等の上級に入った谷口は、在学3年余にして明治17年の夏には46名と共に東京大学予備門分養を卒業し、医学部本科に進学した。一緒に予備門分養を卒業した仲間には湯原元一、北川乙治郎、岡田和一郎、関場不二彦、山口秀高等がいた。

『谷口長雄伝』によると、当時の学生間には語学を研究する必要から文学書を繙く者が多かったが、谷口もその1人で、伊藤隼三、岡田和一郎、関場不二彦等と共に盛んにドイツ文学を研究し、谷口はシラーの『ヴィルヘルム・テル』の一節を訳した「欧羅巴自由の魁」を郷里松山の『海南新聞』（明治16年4月13日付）に発表している。明治10年代は自由民権論の盛んな時期で、スイス独立の伝説的英雄を扱った『テル』は持てはやされ、我が国のドイツ文学翻訳の嚆矢も明治13年に出た『瑞西独立自由の弓弦』（斉藤鉄太郎訳）であった。それだけでなく、医学部予科及び予備門分養時代の独語教師グロートとプッチールの影響もあったであろう。2人ともドイツ文学を好んで教材に取り上げ、特にグロートはシラー物を好み、生徒にも有名な「鐘の歌」などを暗誦させたりした。シラーの論文3篇を収めた『シラー文集』なども予備門の教科書になっていた。予備門分養で谷口の2年後輩の藤代禎輔はグロートやプッチールの影響を受け医学から文学に志望を変更したほどである。その後藤代は、同じく医学から文科に転じた菅虎雄と共に東大独文科の記念すべき第一回の卒業生となるのである。

結論として谷口が学んだ本郷台町の独逸学校、旧東京外語、東大医学部予科、予備門分養は

当時の日本では最も充実したドイツ語の教育機関であり、従ってそこで養成された彼の独語力は相当高度な域に達していたと判断される。シラーの作品を訳していることはその証拠になる。彼のすぐれた語学力は医学部本科へ進学してからも大いに役立ったであろうし、ひいてはその後の彼の出世にも貢献したのではあるまいか。

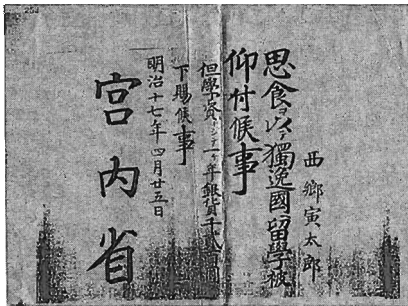
西郷寅太郎の留学

西郷寅太郎は1866年（慶応2）7月西郷隆盛の子として薩摩に生まれた。母は糸子といった。母違いの兄に後年初代京都市長となった西郷菊次郎がいる。ところで維新の最大の功臣であった西郷隆盛は明治10年の西南の役で破れ、一転して賊臣という汚名を着せられることになった。幼くして父と別れ、寅太郎は心寂しく鹿児島に長じ、明治11年4月西郷家の家督を相続した。この頃彼は、城山の麓の三州義塾において今藤白堂、東城鶴山に漢学を学び、岡源太郎に英学を学んでいた。

しかるにそんな寅太郎の元に、明治天皇の御手元金を以てドイツに留学させるとの知らせが宮内省から届いた。天皇は深く西郷南州翁の維新の大功を思い、その嗣子である寅太郎をドイツに留学させることを思い立ったのである。明治17年4月25日付の宮内省から西郷寅太郎に宛てた文書（鹿児島県立図書館蔵）には「思食ヲ以テ独逸国へ留学被仰付候事、但学資トシテ一ケ年銀貨千弍百円下賜候事」とあった。

一方『明治天皇記』の同年4月25日の条にはこの間の事情を次のように記してある。

「西郷寅太郎に独逸国留学を命じ、学費として一箇年金千二百円を賜ふ、寅太郎は西郷隆盛の嫡長子なり、隆盛の死後鹿児島に在り、謹慎して世に出ず、天皇深く隆盛の偉勲を追想し、其の心情を憐みたまひ、客年十二月侍講元田永孚をして旨を正四位吉井友実に伝へて、隆盛遺族の近情を問はしめたまひ、其の嗣子を招かしむ、友実人を遣はし、寅太郎をして上京せしむ、仍りて直に此の命を伝へさせたまふ」



このようにして寅太郎は、天皇の御手元金によってドイツに留学するという全く破格の恩命に浴したのである。そして天皇は彼を留学準備のため東京に呼んだ。明治17年5月6日付で、寅太郎は東京滞在中の手当月々御下賜の沙汰を拝受した。かくして寅太郎は天皇の特別の思召しによって上京した。寅太郎の着京を聞くや、天皇は苦しからずとして直ちにそのまま参内させた。その時の寅太郎の恰好は鹿児島の兵児健児の風丸出しで、紺緋の

羽織に小倉袴という服装で参内し、天皇の龍眼を拝したと伝えられるが、これはまことに異数なことであった。そもそも寅太郎が拝謁の上、僅か三州義塾に学んだだけの身を以て天皇の御手元金によりドイツ留学をしたこと自体異例であった。東京に滞在中はドイツ語を学んだと考えられるが（当時鹿児島にはドイツ語を教える学校は存在しなかった）それがどこの独逸学塾